平成 30 年度　霞ヶ浦学講座　第７講　実施結果

実施日時：平成 30 年 9 月 23 日（日）13:30－15:30　　参加者数：37 名

場所：霞ケ浦環境科学センター多目的ホール　　講師：沼澤篤（霞ケ浦環境科学センター嘱託）

テーマ：「霞ヶ浦と地域の信仰」

要旨：霞ヶ浦の津（河岸）には，鳥居や祠が祀られている。これらは水運や漁業が盛んだった頃，海夫とその末裔である人々が霞ヶ浦の水害を畏れながら，湖水の恵みである水産物や水運をもたらす水神に感謝したことを示している。海夫とは船頭，水夫，漁師等，霞ヶ浦の水上の仕事で暮らしを立てた人々である。水神，水分神，不動明王の祠は，筑波山麓の渓流，集落の井戸などにも設置されている。霞ヶ浦流域は年間平均降水量が全国平均に比べて少なく，灌漑用水の確保に苦労した地域が多いことは，行方地方だけで約 50 箇所の溜池が設置されていることで知られる。溜池には小さな弁天宮の祠が設置されているところがある。鹿島神宮，香取神宮，息栖神社の東国三社と大杉神社は，水上交通の安全や豊漁を祈願する素朴な人々の信仰を集めた。神道では，神羅万象にヤオヨロズ（八百万）の神々が宿るとされ，水神は田の神，山の神とつながると信じられた。

水の神とその精霊を畏敬する信仰は世界中にある。中国起源の龍神，河伯などは日本に伝わった。ヨーロッパでは，ヒドラ，アケーロス，ポセイドン，ネプチューンが水の神，海の神である。インドのヒンドゥー教では，サラスバティー神（弁才天の起源）は河の神，音楽の神として，インドネシアのバリ島ではデビ・ダヌ神が水神として信仰されている。

世界各地の民族は水の神を畏敬することで，生命の源であり，農業，漁業，水運等の恵みをもたらす湖沼，河川に感謝し，汚さないように配慮する生活習慣を守ってきたが，科学，技術，効率，経済性，利便性，合理性を追求する近現代社会では，素朴な水神信仰は軽視され，人々が身近な水を大切にする気持ちは希薄になっていった。同時に，湖沼，河川，海の汚染や過度の富栄養化が進み，地域社会はその対策に追われることになった。

「湖沼は人間を映す鏡」（第１回世界湖沼会議「琵琶湖宣言」）とすれば，まさに湖水は人間の心や社会の変遷を反映しながら変化し，地域社会はいつの間にか，水質や生物多様性を悪化させ，持続的に水の恵み（生態系サービス）を享受することが困難になっている。こうした危機感から始まった世界湖沼会議が再び霞ヶ浦で開催される。科学技術，政策，法令などはもとより重要であり，「科学の英知に深い注意を払う」（第６回世界湖沼会議「霞ヶ浦宣言」）ことは無論だが，同時に「湖の音に耳を傾ける」（同宣言）素朴な心を取り戻し，「湖沼は自分自身である」という認識を育て，多くの人々が全人格的湖沼観を形成できれば，霞ヶ浦をはじめ，多くの課題を抱える世界各地の湖沼は少しずつ蘇っていくのではないだろうか。英国湖水地方の美しい湖沼群は，ビアトリクス・ポターの名作童話シリーズ「ピーター・ラビットのお話」のモチーフが大切にされ，ナショナル・トラスト運動によって守られている先進的事例がある。素朴な信仰心と童話・絵本の世界は通じるものがあり，多くの人々が湖沼を大切にする心を培う上で，「理性と感性の両立」を湖沼環境保全の基本的な考え方に生かす英知が求められているのではないか。